アブ・ル・ライス・スィッディーキー

近代ウルドゥ文学史研究

加賀谷 寛 編訳

آج کا اُردو ادب

از ڈاکٹر ابُواللیث صِدّیقی

ترجمہ کان کاگا پا

(پروفیسر، جامعہ اوساکا السنہ خارجیہ)

東海大学出版会

近代ウルドゥ文学史研究　¥ 6,000

昭和54年2月28日　第1刷発行

編訳者　加賀谷　寛
発行者　山田　渉
印刷者　三浦丈夫
発行所　東海大学出版会
東京都新宿区新宿3-27 東海ビル〒160
電話（356）1541 振替（東京）0-46614
印刷所　港北出版印刷株式会社

3098-0474-5110

目次

解説

第一章　近代ウルドゥ文学史の政治・社会的背景（一八五七―一九六八）

一　「第一次独立戦争」とその挫折……5
二　サル・サィヤドの登場……13
三　ウルドゥ語新聞・雑誌……21
四　新教育の発達……24
五　民族運動の展開……26
六　パキスタン独立と難民問題……31
七　一九六五年戦争……32
八　現代ウルドゥ文学の経済・社会的テーマ……33

第二章　近代ウルドゥ詩史

一　近代ウルドゥ詩の始点と初期……37
二　現代ウルドゥ詩の発展……76

三　近代詩の実験……109
四　ウルドゥ詩の実験の新段階……115
五　現代叙情詩……122
六　現代詩人群（一九三〇年以降）……137
七　進歩主義派の詩……161

第三章　近代ウルドゥ長篇小説史

一　ウルドゥ近代小説の開始から確立へ……179
二　プレーム・チャンドの長篇小説……197
三　進歩主義運動……203
四　小説の新実験……204
五　現代小説家たち……205
六　新進小説家たち……215

第四章　近代ウルドゥ短篇小説史

一　ウルドゥ近代短篇小説の開始と発展……218
二　ウルドゥ現代短篇小説の新しい発展……226
三　進歩主義運動とその影響……228

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

四　分離独立と短篇小説……236
五　最近の短篇作家たち……239
六　最近の短篇小説の傾向と作家……244

第五章　近代ウルドゥ文学批評の発展
一　近代批評の開始……254
二　ウルドゥ批評の傾向と発展……271
三　西欧派の現代批評家たち……289
四　研究的批評……291
五　進歩主義派の批評……294
六　最近の諸動向……298

第六章　近代ウルドゥ論説の発達と新聞・雑誌
一　論説の発達史……302
二　現代の雑誌と論説の傾向と組織……309

参考文献
近代ウルドゥ文学史年表
索　引

解説

ウルドゥ文学 Urdū adab は、十八、九世紀のデリー、ラクナウの両都市の文化を中心として華やかな発展を示して古典を生み、ムガル朝衰退のなかで、かえって文学的には豊かな開花期を迎えた。それ以前の十四―十七世紀デカン・ウルドゥ文学期（ダッキニー Dakkinī 期）を含めてこれらウルドゥ文学全史は、インド文学史のなかで一つの重要な部分を成すものであろう。本書で扱う十九世紀後半から二十世紀六十年代に至る近代ウルドゥ文学史は、このウルドゥ文学全史のなかで一つの重要な時期を成すものである。

わが国の学界において、ウルドゥ文学、就中近代ウルドゥ文学の研究は、これまで大阪、東京両外国語大学の各関係学科（インド・パキスタン語学科）のウルドゥ研究室を中心として進められ、相当の研究成果を挙げてきた。[1]

しかしそれら研究成果はなお近代ウルドゥ文学の諸領域全体をカバーするに至っていない。また作品の個別的翻訳紹介も同時に進められてきたが、[2] ウルドゥ文学史全体の流れとそのなかで作品を位置づける必要が満されていないことも指摘しなければならない。

このために久しく、体系的でしかも実質あるウルドゥ近代文学史叙述の学術書刊行がわが国研究者の間で強く期待されてきた。本編はまさしくわが国におけるウルドゥ学界のこのような要請に応えようとするものである。

ウルドゥ近代文学史叙述の立場には二つが区別される。一つはインド・パキスタン側の研究者、とくに本来のウルドゥ地域である北インド（デリー、UP）出身のウルドゥ文学の伝統を直接自身で継承する文学者によって、ウルドゥ語をもって自らの国文学史として叙述されたものであり、他はインドの植民地統治以来のインド研究の伝統

をもつイギリス、その他の西欧研究者による外部からのアプローチである。この後者の場合、西欧のインド研究が本来古代インド研究に重点をおいたため、ウルドゥ文学研究はいくつかの理由から周辺的領域として取り扱われたといわなければならない。

わが国のウルドゥ現代文学史研究の現段階で必要なのは、当面、前者のインド・パキスタン側の研究者による学術的レベルの高い基礎的な文学史叙述を精確に翻訳し、文学史の流れを彼ら自身の眼と鑑賞法を通じて一方で十分に摂取し、他方で新しい文学史構想のために基礎的な視点を独自に批判的に築きあげることであろうと私は考える。

わが国の出版事情では、アジア・アフリカの近代文学関係の学術書は、近代中国文学を除いて、「特殊すぎる」分野に取り扱われている現状のようであり、本書のような基礎的性格のものは、久しく出版界からは受け入れられず、ここに文部省科学研究費補助金（研究成果刊行費）をもって出版されることになった。

次に本書の内容についてであるが、現代文学をも含む広義の近代文学史を扱い、厳密にはその始点を、一八五七年の「第一次インド独立戦争」の挫折に続くサル・サィヤド・アフマド・カーン（以下「サル・サィヤド」と略）指導の近代ムスリム思想運動に求め、伝統的ウルドゥ文学からの転換を明確に指摘する。ついで両大戦間の「進歩主義運動」などによって劃期される新発展を展望し、一九四七年分離独立がもたらした悲惨な人間状況の証言をウルドゥ文学に求めたのち、独立後のパキスタンの政治社会問題の文学への反映を示唆して、執筆時の一九六七年に至るウルドゥ近代文学の主要な流れに論及するものである。

しかし、その力点は近代文学の始点と、それを発展的に継承して文壇・詩壇・批評界に評価をすでに確立しおわった作家・詩人・評論家とその作品に主として置かれており、六十年代以降に活躍しはじめた新世代の文学者に関しては充分のスペースと公正な評価を与えていない点が、その叙述態度に見出され、将来補足される必要がある。

またその叙述の特色として、近代文学と政治・社会との関連がつねに密接に論じられていることを挙げなければならない。このため政治詩、社会詩を広く取り上げ、近代インド・パキスタンのムスリムの政治意識、民族運動への実践的コミットメントを文学創作と不可分のかたちで認識している。この意味では、本書はインド・パキスタン近・現代史研究者にとっても、貴重な証言集となるであろう。それによってはじめて分離独立以前のムスリムの「コミュナリズム」の歪みや、パキスタン政治の実態の諸側面も、内面から照射されるであろう。

本原著の構成は、以下の八章から成っている。序論で、文学史の背景である一八五七年「インド独立戦争」とそれ以降の政治社会的発展を論じ、ついで近・現代文学の各ジャンル別に文学史的発展を叙述している。

第一章　近・現代文学の歴史的背景
第二章　詩
第三章　長篇小説
第四章　短篇小説
第五章　演劇
第六章　文芸批評
第七章　諷刺・ユーモア文学
第八章　論説

このうち、ここでは主要な内容を成す第一、第二、第三、第四、第六、第八の六章を収めた。

またウルドゥ原書にはない節、小節をたて、見出し、小見出しをここでは付けることにした。また原著書に付されていない文学史年表（片岡弘次君作成）および著書別、作品別、事項別索引を追加した。また文学者の写真、肖

像画を付した。訳注は文中で異説や作者出生死没年、作品出版年などを補うために、〔　〕で加えた。

原著者は、パキスタン国カラチ大学文学部ウルドゥ科主任教授（当時）であり、学位論文『ラクナウ詩派』Lakhnaū kā Dabistān-e Shā'irī, 1944 によって文学博士号を得た。

なお、本訳稿が成るにあたって、大阪外国語大学インド・パキスタン語研究室、および東京外国語大学ウルドゥ語研究室の鈴木斌教授から助力を得たことを付言する。同じくご教示をいただいた大阪外国語大学前外国人教師A・K・カシュフィー博士、および同現外国人教師ナースィル・アフマド・カーン博士に感謝を捧げる。

最後に、このような特殊な学術図書の出版を快くお引受けいただいた東海大学出版会に謝意を表し、とくに編集に当られた渡辺雅子さんには多大なご面倒をおかけした。

原著書名　Āj kā Urdū Adab
原著者名　Dr. Abū al-Laith Ṣiddīqī
出版社名　Fīrūz Sons, Lahore
出版年（初版）　西暦一九七〇年

昭和五十三年

加賀谷　寛

注

（1）それら研究成果は、『大阪外国語大学学報』、『東京外国語大学論集』に主として発表されてきた。

（2）ウルドゥ、ヒンディー、ベンガーリーの現代文学作品の翻訳紹介の場として、『インド文学』が一九六八年から発行されている（東京外国語大学、インド・パーキスターン研究室内インド文学会。一九七八年三月発行の十二号が最新号である。）

第一章　近代ウルドゥ文学史の政治・社会的背景（一八五七―一九六八）

一　「第一次独立戦争」とその挫折

近代ウルドゥ文学史は、一八五七年にはじまる。この年は、ウルドゥ語・文学にとってだけでなく、インド亜大陸〔原文「パキスタン・インド亜大陸」〕の歴史にとっても、大きな政治的・社会的重要性をもっている。一八五七年五月十日、メーラト駐在の軍隊（第三騎兵連隊）が「反乱」を起した。メーラトのこの兵営は、ムガル朝首府デリーから、わずか三十六マイル離れた重要な基地であった。この傭兵（スィパーヒー）の反乱は直接的には、八十五人の傭兵が軍事法廷の判決によって、十年間の懲役刑を言い渡されたことに端を発した。彼らは、頭部に脂を塗った薬莢を渡されて、しかもそれを自分の口でくわえて操作するよう命ぜられたとき、その使用を拒否した。この薬莢の脂には豚と牛の脂が混合してあるという噂が広がっていた。豚はムスリム〔イスラム教徒〕にとって、穢れた不浄な動物であり、ヒンドゥー（教徒）にとって、牛は崇拝の対象であった。ヒンドゥーとムスリムにとって、この脂を使わ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

せられることは、各自の宗教を冒瀆される以外のなにものでもなかった。

反乱開始とともに、同騎兵隊のインド人傭兵は、反則兵士を救出するため、営倉を襲撃した。この間、第十一、第二十各歩兵連隊のインド人傭兵たちが、イギリス人士官の家を包囲して、数名を殺害した。こののち反乱兵士はデリーに向かって進撃した。翌朝までに、この反乱の火はデリーに燃え広がっていた。デリーには、バハードゥル・シャー〔在位一八三七―五八〕が王座にあり、ムガル朝の継承者で、その支配権の無力さにもかかわらず、インド皇帝とみなされており、東インド会社は、現実の支配者であるにもかかわらず、公式にはそれまで単なる皇帝の代理人の資格をもっているにすぎなかった。反乱者たちは、この皇帝を擁立し、英国の増大する権力、欲望、圧政に対して反乱の旗を押したてた。彼らは、一部のウラマー〔イスラムの伝統的学者〕がジハード〔聖戦〕を宣したこの神聖な戦争に、生命、財産を投げうって参加した。デリーから離れた地方でも、この「反乱」の報が広まると、住民は歓声を挙げて「聖戦士」mujāhid〔ジハード参加者〕の戦列に加わろうとした。この有様はまさに、インドで英国の幸運なる太陽がまさに天の頂点に達しようとするその寸前に、西の空に没し去ろうとするかのようにみえたし、金と銀の国インドのすみずみまで支配しようとするその夢が結局恥ずべき夢に終るかのようにみえた。一七五七年のプラッスィーの戦いののち、インドをイギリスから解放する闘いがそれまでずっと行われてきたが、それらの闘いのなかでも、この闘いは最大の規模のものであった。これには、あらゆる階層、あらゆる集団、あらゆる宗教の人々が参加した。しかし残念ながら、この「独立戦争」は、挫折と敗北に終った。一八五七年九月十九日夕までに、イギリス側の軍がデリーの全軍事拠点を占領した。同日、ムガル皇帝は、デリーの城、ラール・キラー上から悲しみの最後の別れをしたのち、城外に出た。皇帝の父祖が代々築き、ムガル朝の光輝、偉大さ、誇りであった、あのラール・キラー城は、ここに全く棄てられた。皇帝はこの居城から逃げ落ちて、デリー市郊外のフマーユーン

廟に着いた。ここで英国陸軍少佐ハドソンが、皇帝を護送し、車に乗せてデリーに引き戻した。この哀れな行列は、観るものに、懲罰を思い知らせた。バーブル帝〔ムガル朝第一代〕、フマーユーン帝〔第二代〕、アクバル帝〔第三代〕、ジャハーンギール帝〔第四代〕シャージャハーン帝〔第五代〕の継承者が、よろめく足で、かつては戦勝者の父祖のまえに被征服者の将軍たちがひれ伏したこの都市に入って来た。イギリスは戦勝記念を血で祝賀した。哀れな皇帝のまえで、その王子、皇族を大砲で撃飛ばした。一ヨーロッパ人、スミス・ボスワースが書いているように、この光景は、冷酷さをむきだしにする以外のなにものでもなかった。このとき、その皇太子の首を斬って、盆に載せて、父王のまえにもってこさせた。皇太子の首は血にまみれていた。年老いた父王はこれを見て、ただつぎのようにつぶやいた。「然り。ムガル朝の王子がこのように〔血で〕赤く頬を染めて〔同時に「務めを立派に果して誇らかに」の意を含めて〕やって来たのか」と。この首は、かつてはカーブルからカルカッタまで王国を拡大して、「二十二州の王」とよばれた王朝の王子のものだった。この有名な王朝の「目と輝き」〔皇帝〕は、すでに名目的であったが、この日、インド独立の志士の頭目の役割を引き受けたという罪状で、英国支配の虜囚となった。そして陰謀と反乱罪で裁判にかけられたが、裁判といっても、検事がそのまま判事であったようなものだった。数日間、裁判らしい真似ごとが続いた末、予想されたとおりに、反乱罪で罰せられることに決まり、英国軍が構成するこの法廷で流刑を宣告された。ラングーンの地に送られて、一八六二年に彼の地で没した。以前にデリーのラール・キラー城の博物館に一つの絵があった。それが現在もあるかどうかは知らないが、その絵は、その最後の日々の哀しさをありありと描いたものだった。「孔雀の王座」に座した諸王の継承者が、獄舎で悲哀の極で横たわり、その衰弱した血の気のない顔から、このダルウェーシュ〔ムスリムの托鉢僧〕のような性質をもった皇帝が悩んでいた深い苦痛、孤独さ、逆境がその絵には滲み出ていた。

一八五七年の「独立戦争」〔インドでも、パキスタンでも、the War of Independence とよぶようになっている〕の挫折は、単にその結果が行政面に限られるような性質の政治的事件に止まらなかった。これについてI・H・クライシー博士〔元カラチ大学総長で、歴史学者〕はつぎのように述べている。(1)

「近代インド・ムスリム史上で、一八五七年の事件は、二重の意味をもっている。一方で、この事件がムガル朝のイメージに、最後の具体的な打撃となったことであり、他方で、あらゆる面でムスリムの衰退を決定的にしたことである。」

この衰退の物語を一つ一つについて語るとすれば、余りにも長くなるであろう。ここでは、その詳細を述べることはできない。これについて、この同時代者たちのうち、サル・サィヤドがその著『インドの反乱の諸原因について』〔一八五九〕のなかで、この抵抗の原因を論じながら、インド住民一般、とくにムスリムが〔イギリス支配下に〕蒙っていた不当な状態を分析している。その経済は破滅していた。なぜならばイギリスは当初から、インドを金の鳥とみなしており、そのすべての努力は、合法的あるいは不法に、インドの富を集積してもち出すことに費されたからである。英本国から三流どころの人物がインドに来て統治者となって、インドの富をみて目がくらんだ。彼らはインド滞在中、ナワーブ〔ムスリム貴族〕のように生活し、インドから帰国するときは、英本国で自分が贅沢に暮せるだけでなく、自分の子孫までも贅沢に暮せる財産を遺せるほど、蓄財するのだった。これらの話は英国人自身の口から聞くがよい。(2) 英国議会でヘスティングが査問されたとき、英国の有名な著作家で議員だったバークは、ヘスティングとその一味の掠奪ぶりを明らかにしたが、それを聞くと、さすがの英国人も冷汗が出たほどだった。

もう一つの打撃は、インドの土着工芸に加えられた。英国はすでに産業革命を迎えており、機械織の布やその他

の安価で劣悪な商品の販売のための市場を求める必要から、ヨーロッパで珍重されていたインドの工芸品の生産を停止させなければならないと考えるに至った。このようにして、彼らはダッカ〔バングラデシュ首都〕とムルシダーバード産のモスリン、ベナレスの絹織物の織工たちの手を切り落させた。これは単なる作り話でなく、歴史のページに確証されているところであり、二十世紀に至るまで全世界に倫理と人間性の教訓を説くかのように振舞った民族が犯した圧制・専制の証拠である。要するに、このようにして無数の織工が破滅し、職人は貧困におちいって流浪した。これらの破滅のテーマは、当時のウルドゥ詩人によって「破滅した都市の歌」Shahr-e-āshūb とよばれる多数の詩に詠まれた。(3)

サル・サィヤドのいうように、一握りの豆で腹を満そうとして人々がイギリス軍に傭われた理由はここにあった。商業はイギリス人自身と、それにヒンドゥーの仲買人によって握られ、ムスリムは排除された。ムスリム貴族 Shurafā の役職は、かつては軍人となることだったが、国庫が空になり、王朝が「シャー・アーラム帝〔在位一七五九―一八〇六〕の王国は、デリー市から郊外のパーラム（現在デリー空港のある地）までに〔一握りの土地に〕なった。」といわれた当時では、これら軍人階級をだれが養うことができたであろうか。辛うじて一部のムスリムの手に土地が「ジャーギール」〔封土〕の名目で残っていたが、それすらも漸次、いろいろの口実で英国支配によって取り上げられてしまった（侯国の併合の歴史は一つの悲劇的な物語で、ここでは取り上げる余裕はない。一八五六年のアワド侯国の併合は、この過程の一環であった）。同様に、宮廷に寄食する詩人・文人のような階層も、全く生活の糧を失った。

要約すれば、あらゆる面で全くの暗黒が支配した世界になった。このようななかで、ムガル朝は名目だけのものに化したが、この消えなんとする燈火もなお人々にとっては最後の希望の光として映り、デリーの皇帝の無力さに

もかかわらず、人々は王に尊敬を示しただけでなく、愛着を懐いていた。[4]〔一八五七年反乱の挫折によって〕この名目的であったが心の支えとなっていたものも最終的に消え去ると、一人一人が極度の絶望と敗北感におちいった。

政治的にみて、この「革命」の直接的結果としてインドのムスリムの大多数がきわめて困難な状態に見舞われたことになった。勝利者の英国当局はこの「独立戦争」を「反乱」(Ghadar) とよんで、この全責任をムスリムにかぶせた。その一つの理由は、英国はムスリムから支配権を奪取して、ムスリムを対抗者とみなしていたからである。第二に、英国側は、ヒンドゥーがそれまで八百年もムスリムの支配を受け入れて来た以上、いま英国の新統治を認めない筈がなく、ヒンドゥーにとって、この変化は単に主人公の変更でしかなく、彼らにとっては新しい主人は旧主人よりもよいことが明らかであると見抜いていたからであった。

それに対して、ムスリムの側では、ウラマー層と、その影響下の大衆のあいだに、英国支配とのいかなる協力も罪悪であると考える傾向があった。これらのものにとって、英国支配に対する戦争は、宗教的義務の「聖戦」(ジハード)を意味するものだった。

これらの結果、英国はすべての怒りをムスリムに向けこの闘争で殺された英国人同胞の血の報復のため、軍事裁判所を設け、ナーディル・シャー〔十八世紀のイラン皇帝。デリーの掠奪者として有名〕以上の掠奪と不義を行った。戦闘で殺されたものの数よりはるかに多くのものが、戦闘終結後の裁判で射殺されたり、絞首刑のため樹々に吊された。町の小路・横丁にもスパイがうろつき、少しでも「反乱」に参加したり「反乱者」を保護したり、なんらかでも彼らを援助したり、英国人が殺されるのを救わなかったりした嫌疑がかけられたものを密告して歩いた。その疑いをかけられただけで破滅し、スパイの証言に一方的に基づいて、なんの証拠もなしに弁明の機会も与えられず、判決が下された。市民の財産は掠奪された。家屋は土台から倒されて放棄されただけでなく、市民には市内

に入ったり、居住する許可が与えられなかった（このことは、デリーの詩人ガーリブ〔一七九六―一八六九〕の書簡に、なんども触れられている）。市民のなかでも、死んだものは、まだ苦しまずに済んだようなもので、多くのものは犯罪人キャンプに強制的に移された。このような収容所の一つは、アンダマン島に設けられ、そこは、「無期島流し」とよばれた重罪人が送られていたが、ここにムスリムのウラマー指導者たちが島送りにされた。この悲惨な話は、ファズル・ハック・カイラーバーディーならびにムニール・シコーハーバーディーによって記録されている。祖国の独立闘争に身を捧げた彼らは、祖国から数千マイル離れて、厳しい気候に耐え、肉体的苦痛をしのんだ。彼らの犯した罪状とは、インドを外国の支配から解放しようとしたことであり、その外国支配者といえば、インドの文化、社会、慣習、信仰、思想とは全く異なっており、数千マイル離れた英本国から、インドの統治・行政を行っていたものだったのだ。

ムスリムだけでなく、この「革命」にはインドのムスリム以外のものも参加したが、これらは英国によるこのような罰を免れただけでなく、一部のものには賞状さえ与えられた。一八五七年以後、英国はスィクを取り立て、その力を補強してやった。この目的は、一つには自分の協力者に賞を与えるためであり、もう一つは、ムスリムの苦痛をそれだけ倍加させるためであった。スィクはもともと、インドの地からムスリム統治を追払い、打倒するために生まれ、それを目的として誓っていた。ムガル朝後期には、ムガル朝を弱体化させ、衰退・分裂を進めるうえで、彼らは大きな役割を果した。サィヤド・アフマド・シャヒード〔シャヒードとは殉教者〕、サィヤド・イスマーイール・シャヒードは、この危険を阻止するために自身の生命を捧げた。〔一般に「ムジャーヒディーンの運動」とよばれる。イギリスは「ワッハーブ運動」とよんだ〕。それでも事態は好転せず、一八五七年ののち、パンジャーブでは、とくにムスリムが苦難を受けることになった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com